

トゥルファン出土の難字音注断片に 反映されるウイグル漢字音について

—— ベルリン所蔵の二断片 Ch/U6781 と Ch2369 の分析 ——

橋 本 貴 子

- 0. はじめに
- 1. テキスト
 - 1. 1. Ch/U6781
 - 1. 2. Ch2369
- 2. 音注状況の整理及び検討
 - 2. 1. 声母の通用状況に関する考察
 - 2. 2. 韻母の通用状況に関する考察
 - 2. 2. 1. 声調の区別について
 - 2. 2. 2. 撰の枠を出ないもの
 - 2. 2. 3. 撰の枠をはみ出すもの
- 3. まとめ：ウイグル漢字音のウイグル語化と「二層の字音」説について

0. はじめに

今回筆者が扱うのは、ベルリン所蔵の難字音注断片、Ch/U6781 と Ch2369¹ であり、いずれも吉田豊先生に紹介していただいたものである。筆者が調査した結果、この二断片の内容はいずれも漢訳仏典の難字音注であることが分かった。Ch/U6781 は『金光明最勝王経』、Ch2369 は『妙法蓮華経』に対する難字音注である。また、この二断片の音注状況を整理してみたところ、ウイグル漢

1 この二つの断片は Depositum der BERLIN-BRANDENBURGISCHE AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN in der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN—Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung の一部分である。本稿執筆にあたり、二断片の写真と画像データを送って下さった上、その写真の掲載と内容に関する研究の発表を許可して下さい下さった BRANDENBURGISCHE AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN に感謝する。

字音の特徴が濃厚に反映しているのが確認され、しかも他のウイグル漢字音資料では見られない、非常に進んだウイグル語化と思われるような特徴も観察された。よってここにその詳細を報告し、若干の私見を述べることにした。

ウイグル漢字音とは、唐末頃から元朝期までトゥルファンにおいてウイグル人達が使用していたと考えられる漢字音のことである。トゥルファンで発見された『法華経』難字音注および『慈悲道場懺法』難字音注を研究した高田 1985は、その音注にウイグル式の漢字音が反映していることを明らかにした。高田 1985の難字音注と類似の資料としては、庄垣内 2001が扱った『天地八陽神呪経』難字音注があり、これもウイグル漢字音を反映したものである。

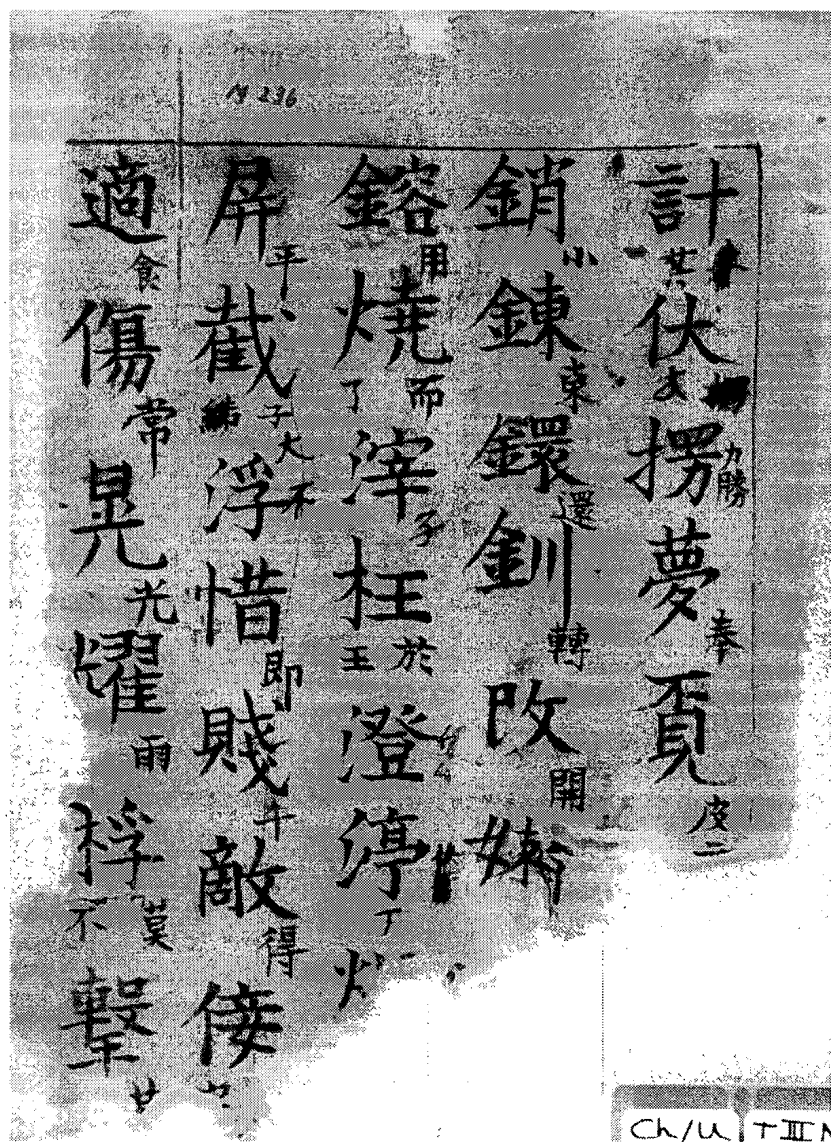
他にウイグル漢字音を反映する資料としては、ウイグル文字で表記したものがあることはもちろん言うまでもないが、ソグド文字やブラーフミー文字で表記したもの等も存在する。ウイグル文字によって表記されるウイグル漢字音資料が示すところによれば、ウイグル漢字音が基礎としたのは、高田 1988がチベット文字資料によって示した「河西方言」であったと考えられている。³

ところで、今回の二断片のうち Ch/U6781については、吉田 1999によってその存在が報告されている。⁴ また栄 1998で報告されたドイツのトゥルファンコレクションのうち仏典を除いた漢文文書の目録に、Ch/U6781と Ch2369がウイグル漢字音資料であるとの記載がある。この情報は高田時雄氏が1996年の中国敦煌吐魯番学術討論会で発表された《回鶻字音補證》(提要) から得たものであるらしい。残念なことに、今回筆者はその発表稿を目にすることができなかった。だが、管見によれば、これまでのところ Ch/U6781と Ch2369につい

2 ウイグル文字で表記したウイグル漢字音資料については庄垣内 1986, 同 1995, 同 1997, 同 2001を参照。なお、脱稿直前に庄垣内 2003を目にすることができた。これは以上のうち後者4論文をまとめたもので、本来ならばこちらを参照するべきであるが、残念ながら時間の制約上、十分には参考にすることができなかった。よって今回は主に庄垣内 1995~2001を参照し、一部においてのみ庄垣内2003に言及することにしたが、それによって本論文の趣旨に大きく影響することはないと考える。ソグド文字で表記したウイグル漢字音資料については吉田 1994を参照。ブラーフミー文字で表記したウイグル漢字音資料についてはCsongor 1962およびMaue 2002を参照。

3 高田氏はウイグル漢字音が「河西方言」型の字音体系と長安標準音型の二層をなしていたという説を提出しておられる。詳しくは後述。

4 吉田 1999, p. 2, 脚注(3)。



Ch/U6781

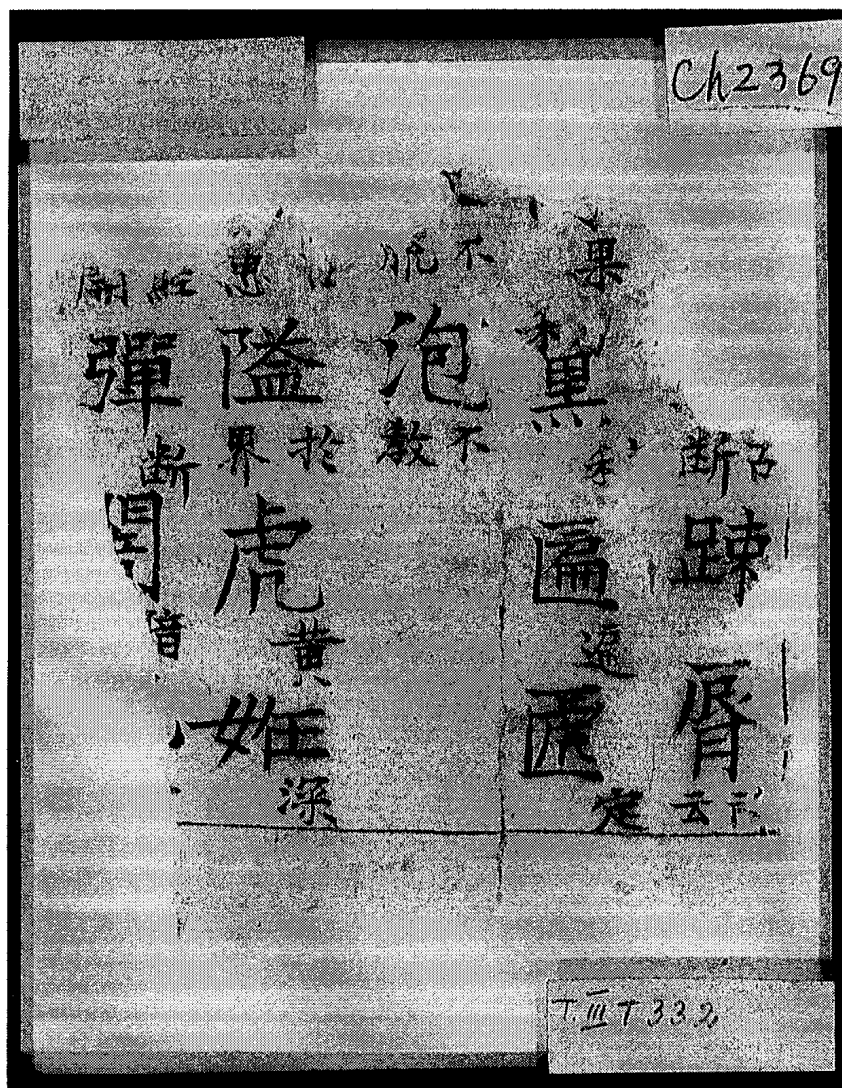
での正式な研究の発表は行われておらず、本格的な報告は恐らく今回が初めてであろうと思われる。

Ch/U6781の旧番号 THIM236.501⁵が示す情報によると、この断片は第3次トゥルファン探検隊（1905-1907）がトゥルファン盆地のムルトウクで入手したものである。大きさは縦17.4×横12.7（cm）である。裏面はウイグル語の文章⁶が書かれている。断片の内容は、『金光明最勝王経』（『大正新脩大蔵経』⁷ 16, No.665, 義浄訳）巻二に対する音注である。

5 この旧番号の見方については Gerhard Schmitt und Thomas Thilo, 1975, Einleitung p.11 を参照。

6 ウイグル語の内容については後述。

7 以下、『大正蔵』と略す。



Ch2369

もう一つの断片 Ch2369の旧编号は TIIIT332で、第3次トゥルファン探検隊がトゥルファン盆地のトヨクで入手したものである。大きさは縦10.7×横10.4 (cm) で、内容は『妙法蓮華経』(『大正蔵』9, No.262, 鳩摩羅什訳) 卷六に対する音注である。

以上二つの断片は、外枠の線の存在や、文字の形等から一見、版本のような印象を受けるが、文字のはねの先端部分が非常に細いことや、墨の濃淡にむらがあること、文字の排列が縦横にそろえられていないこと等から、写本であると判断できる。また、この二断片の筆跡は非常によく似ているので、同一人物によって書かれたものであると思われる。ただ、音注部分の書き直し箇所につ

いては、その筆跡が全体と比べていささか幼稚な印象を与えるので、或いは別の人物の手によるものかもしれない。

1. テキスト

以下ではまず Ch/U6781 および Ch2369 の録文を掲げ、次に文字の判読に関して説明を加える。録文中、[] は断片の欠損箇所を示し、□ は判読、推定が不可能な文字であることを示す。なお、容易に判読できるものについては特に説明を加えない。

1.1. Ch/U6781

5	4	3	2	1
適 食	屏 平	鎔 用	銷 小	計 其□
傷 常	截 □子 大	焼 了而	鍊 東	伏 □□
晃 光	浮 不	滓 子	鑲 還	楞 力勝
耀 雨	惜 即	枉 王於	釧 轉	夢 奉
桴 不莫	賤 千	澄 淳 丁	改 開	覓 皮□
擊 □	敵 得	煙	嬾 「	「
「	倭 □	「		
		「		

文字の判読に関する注⁸：

1 行目：

計：409a12。原則的には音注は被注字の下に右から左へと書かれている。

まず、この「計」の字の右下に何らかの文字が塗りつぶされている。

「木」或いは「不」のように見えるが、今のところ特定できない。その左側には「其」の字が書かれている。

伏：409a19。右下には「楞」（実際には手偏）の字が塗りつぶされている。

その左には「丈」或いは「夫」のように見える文字がある。「丈」だと発音の上で「伏」と全く合わず、「夫」もまた、後述するようにウイグル漢字音では入声末尾の子音を区別するのが原則なので、ウイグル漢字音の音注としては相応しくない。

楞：409c14。実際には手偏で書かれている。ここでは音注が被注字の下ではなく、右横に「力勝」と書かれている。

夢：409c25。

覓：409c29。右下に「皮」の字が見える。その下に何らかの文字の上部が見えるが、特定できない。

2 行目：

銷鍊：410a1。「鍊」の音注字は「東」と書かれているが、発音が合わない。所謂「百姓読み」による誤りであると思われる。

鑲釧：410a2。

改：410a2。

嬾：410a9。文字の右3分の1程が不鮮明であるが、経文から「嬾」の字であることが分かる。右横にはなべぶた或いはうかんむりのようなものが見える。音注字の一部と思われる。

8 左から順に、被注字、被注字の『大正蔵』における位置（頁数、abcは段の上中下を示す、行数）、被注字および音注に使用されている文字の判読について説明する。

3 行目：

鎔 : 410a21。

焼 : 410a22。

滓 : 410a24。經典本文では「澄滓」の後に現われるが、ここでは何故か順序が逆になっている。右下に「子」と音注されている。

枉 : この字は經典本文中に見当たらない。⁹

澄滓 : 410a23-24。經典本文では「滓」の前に現われる。「澄」の右側に漢字らしくない文字が見えるが判読不能である。「滓」の右側にも文字のようなものが塗りつぶされている。下に「丁」と音注されている。

煙 : 410a27。実際には火偏の部分のみが残っているが、經典本文において「澄滓」と4行目の「屏」の間に「煙」の字があるので、それと判断できる。

4 行目：

屏 : 410a27。

截 : 410b2。右下に「子」が書かれ、左には「結」のように見える文字が消されている。「結」は「截」と同じく屑韻字であるので、「子結」というのは「截」の反切として正しい。しかしこの字を塗りつぶして「子大」という反切が施されているのは「栽、裁、載」等の類推によって誤ったものと考えられる。

浮 : 410c1。右下に音注はなく、「浮」字の右側に「不」と書かれている。

惜 : 410c5。

賤 : 410c20。

敵 : 411a5。

倭 : 411a7。大正藏では「倭」に作る。反切のうち右側の字は破損している。左側の字の上方部分はいかんむりのように見えるが後は破損しているため不明である。「倭」と同音の「寧」の字である可能性も考えられる。

9 經典本文中の語句「滓穢」の「穢」が誤写されたのではないか、とのご意見を吉田豊先生から頂いた。

5 行目：

適 : 411a10。実際のテキストでは旁が「商」のように作られている。

傷 : 411a11。

晃 : 411a20。

耀 : 411a20。右下に音注字「雨」が見える。左下の反切下字が期待される箇所は破損している。その位置から考えて文字の一部が現われてもよさそうであるが、全くの余白になっているので、直音による音注であるかもしれない。

桴 : 411a22。

擊 : 411a22。右下の字は上部のみが見えるが、文字を判読できない。左側は余白になっているので、直音による音注である可能性が高い。

1. 2. Ch2369

5	4	3	2	1
┌	┌	┌	┌	
開經	恵□	脱不	果	
彈	隘	泡	鰲	┌
断	界於	教不	利	断古
闇	虎		偏	踈
暗	黄		遍	□
┌	妊		匱	脣
┌	深		定	云所

文字の判読に関する注：

1 行目：

先頭の文字：被注字はほとんどが破損している。反切は「古断」であるから、

被注字の候補としては經典本文中の「洹 (46c17)」「漢 (46c23)」「間 (47a10)」等が考えられるが、特定できない。

踈 : 47a13。直音部分は破損しているため不明である。

脣 : 47a14。

2行目：

先頭の文字：「果」と音注されているので、被注字は經典本文の「喁 (47a15)」であると考えられる。

鰲 : 47a15。音注字は「利」。一部破損している。

匾 : 47a16。

匱 : 47a16。

3行目：

先頭の文字：「不脱」と音注されているので、被注字は經典本文の「沫 (47b5)」であると考えられる。

泡 : 47b5。

4行目：

先頭の文字：反切上字は「古」のように見える。すると被注字は經典本文の「桂 (48c16)」である可能性が高い。

隘 : 49a6。

虎 : 49a6。

妊 : 49a8。

5行目：

先頭の文字：反切「經開」。經典本文の「欸 (51c23)」ではないかと思われる。

彈 : 51c23。

闇 : 52b27。音注字は「暗」。被注字、音注字の両方とも部分的に欠損している。

最後の文字：わずかに残画が見えるが文字を特定できない。

2. 音注状況の整理及び検討

以下では前章での文字の判読結果を踏まえ、資料の音注状況を整理、考察する。文字が欠けているものでも、前後関係などから判断できるものは分析対象とするが、音注が明らかに誤りであると判断したものや、破損のために文字を特定できないものは除外する。下に掲げるのは所謂「百姓読み」による音注の誤りと判断したものである。文字の右肩に*をつけているのは、それが推定により復元した文字であることを示す。

被注字	音注字	テキスト ¹⁰	被注字	音注字
鍊	東	金 2	山開四去霰来	通合一平東端
截	子大	金 4	山開四入屑從	蟹開一去泰精
喁*	果	妙 2	蟹合二平佳溪	果合一上過見

次に、音注状況を検討するに当たり、漢語の中古音の枠組みに従って整理、分類を行った（表1～3）。参考の便宜のために平山 1968による中古音の推定音価を付しておいた。但し、唇音幫 p-, 滂 p'-, 並 b-, 明 m- のうち後に軽唇音化したものについては推定音価の上で重唇音と区別させる必要から、ここでは便宜上、非 f-, 敷 f'-, 奉 v-, 微 m- と表記することにする。

更に、このようにして整理した結果を、庄垣内氏の研究で推定されているウイグル漢字音¹¹や高田 1985, 同 1990, 庄垣内 2001で扱われている難字音注の音注状況と比較することによって、今回の難字音注に反映する音韻体系の特徴を考察していく。また必要に応じて、ソグド文字、チベット文字、コータンのブラーフミー文字による漢字音資料、『開蒙要訓』の音注状況、及び敦煌文献の別字異文等も参考にする。¹²

10 「金」は Ch/U6481『金光明最勝王経』「難字音注」, 「妙」は Ch2369『妙法蓮華経』「難字音注」という意味である。「金 1」とは Ch/U6481の 1 行目を表す。

11 以下において使用する「ウイグル漢字音」, 「推定音」とは、いずれも庄垣内氏の推定されたウイグル漢字音のことを指す。また同氏の推定音は//内に示す。庄垣内 1986, 同 1995, 同 1997, 同 2001を参照。

12 吉田 1994, 高田 1988, 羅 1933, 邵 1963, 松尾 1979を参照。

表1 声母による分類表

	被注字と音注字の声母		被注字	音 注	テキスト
唇 音	幫 p	～ 幫 p	匾	遍	妙2
	滂 p'	～ 非 f	泡	不教	妙3
	並 b	～ 並 b	屏	平	金4
	明 m	～ 並 b	覓	皮□	金1
	明 m	～ 奉 v	夢	奉	金1
	奉 v	～ 非 f	浮	不	金4
	明 m	～ 非 f	沫*	不脱	妙3
	奉 v	～ 明 m	桴	莫不	金5
舌頭音	透 t'	～ 定 d	匿	定	妙2
	定 d	～ 端 t	渟	丁	金3
	定 d	～ 端 t	敵	得	金4
	定 d	～ 定 d	彈	断 ¹³	妙5
	来 l	～ 来 l	楞	力勝	金1
	来 l	～ 来 l	鰲	利	妙2
牙喉音	見 k	～ 溪 k'	改	開	金2
	見 k	～ 群 g	計	其	金1
	溪 k'	～ 見 k	欸*	經開	妙5
	見 k	～ 見 k	桂*	古惠	妙4
	曉 h	～ 匣 h	虎	黄	妙4
	匣 h	～ 見 k	晃	光	金5
	匣 h	～ 匣 h	鑲	還	金2
	影 ?	～ 影 ?	枉	於王	金3
	影 ?	～ 影 ?	隘	於界	妙4
	影 ?	～ 影 ?	闇	暗	妙5
	以 j	～ 以 j	鎔	用	金3
	以 j	～ 云 h	耀	雨*	金5
齒頭音	從 dz	～ 清 ts'	賤	千	金4
	心 s	～ 精 ts	惜	即	金4
	心 s	～ 心 s	銷	小	金2
正齒音 齒上音 舌上音	昌 tc'	～ 知 t	釧	轉	金2
	書 c	～ 船 dz	適	食	金5
	書 c	～ 禪 z	傷	常	金5
	書 c	～ 日 ɲ	燒	而了	金3
	船 dz	～ 生 ʃ	脣	所云	妙1
	莊 tʃ	～ 精 ts	滓	子	金3
	日 ɲ	～ 書 c	妊	深	妙4

2.1. 声母の通用状況に関する考察

以上の分類表を一瞥すると、漢語の有声・無声、有気・無気を区別しない、

13 「断」には端母 t- の読みもある。

歯頭音において破擦音の精母と摩擦音の心母を区別しない、という特徴が見られる。よって、この二つの音注資料が反映する音韻体系がどの時代の、或いはどの地域の漢語方言の音韻体系からも大きく逸脱したものであることが分かる。そして以上のような特徴はまさにウイグル漢字音の特徴であり、この資料がウイグル漢字音を反映したものである可能性が極めて高いと言える。また次節で述べるように声調が区別されていないこと、Ch/U6781の裏面にウイグル語が書かれていることも¹⁴、この資料とウイグル語との関係を示唆している。

＜唇音＞

ウイグル文字資料では、重唇音の幫 p-, 滂 p'-, 並 b- および鼻音韻尾を持たない明母 m- を p- と表記し、鼻音韻尾を持つ明母 m- を m- と表記する。ウイグル漢字音では、幫 p-, 滂 p'-, 並 b- は /p-/、鼻音韻尾を持たない明母 m- は /b-/、鼻音韻尾を持つ明母 m- は /m-/ と推定されている¹⁵。これはウイグル漢字音導入当時の西北方言の明母が、鼻音韻尾を持つ場合の声母は鼻音として現われ、鼻音韻尾を持たない場合は脱鼻音化して破裂性の子音として現われる傾向を反映したものである¹⁶。

今回の難字音注では、/b-/と推定される明母 m- と /p-/と推定される並母 b- の通用例「覓」～「皮□」が見られる。このような /p-/ と /b-/ の通用は他の難字音注にも見ることができる。例えば、「謬」～「皮九」（並母 b- と明母 m-

14 裏面のウイグル文字で書かれた文章の具体的な内容について、ベルリン・Turfanforschung の P. Zieme 教授が以下のようにご教示下さった。P. Zieme 教授に心より感謝申し上げます。

部分A) 文字転写: qwyn yyl pyr ykrmy k' "c[...]

音素転写: koyn yil bir y(i)g(i)rmikā ač.[...]

翻 訳: "Sheep-year, on the eleventh, ..."

部分B) (A 部分とは逆向きで)

文字転写 1 [...] "syz('qyz?)'ldy y'nkyq' mnk' mnkl'yqwey {k} k'

2 [...] k pwlwp

音素転写 1 [...] asiz(agiz?) alti yanika M(a)ŋlayguči

2 [...] kǎrgǎ]k bolup

翻 訳: 1 [...] on the sixth, to me, M(a)ŋlayguči

2 [...] became [necessar]y.

15 庄垣内 1995, pp.92-94.

16 これは長安方言を反映する不空訳の音訳漢字にも見ることができ、西北方言全体の特徴であったと考えられる。Maspero 1920, 水谷 1957, 劉 1984を参照。なお、明母 m- と同じように中古ノ

の通用)¹⁷、「ト」～「木」(幫母 p- と明母 m- の通用)¹⁸の例がある。漢語側では当然のことながら、この両声母を混じることはないから、これはウイグル語側の問題ということになる。Csongor 1962によると、ウイグル語の語頭には [p-] が立たない¹⁹。また Erdal 1998は、有声・無声を区別するマニ文字やルーン文字の資料が示すところによると、ウイグル語を含む Old Turkic において、有声の [b-] は /p-/ の異音として語頭に現われると述べる²⁰。つまり、語頭では無声の /p-/ と有声の /b-/ が対立しない。これによって、ウイグル漢字音における /p-/ と /b-/ が通用することを説明できると考える。ブラーフミー文字で表記されたウイグル文献において、漢語の明母字「戊」が pu と表記されている²¹のも、以上の説明を支持するものと考えられる。

軽唇音の非 f-, 敷 f-, 奉 v- はウイグル文字資料において v- で表記され、ウイグル漢字音では /f-/ と推定されている。従って漢語の重唇音は /p-/、軽唇音は /f-/ として区別されていたことになる²²。だが、ここでは重唇音と軽唇音が通用する例が多く見られる²³。しかも /p-/ と推定される幫 p-, 滂 p'-, 並 b- とだけ

ㄋ 音で鼻音であったと推定されている泥母 n-, 疑母 ŋ-, 日母 ɲ- もこの時期の西北方言では脱鼻音化していた。しかしながら鼻音韻尾を持たない場合に脱鼻音化するというのは、あくまでも傾向であったと考えるべきである。不空訳の音訳漢字、チベット文字資料、コータンのブラーフミ文字資料などの示すところによれば、鼻音韻尾を持つ場合でも脱鼻音化することがあったようである。劉 1984, p.46-47, 高田 1988, pp.86-93を参照。ウイグル文字で表記されたウイグル漢字音資料では、漢語の泥母 n- は鼻音韻尾を持つ場合でも脱鼻音化を反映することがあるが、明母 m- ではそのような例がないので一見特異な印象を受ける。一例のみ見える「民」 vwn (庄垣内 2000, p.172) は表記上問題を有するため、これを脱鼻音化の例と見なすかどうかについて今は保留としておく。だが今回の資料では鼻音韻尾を持つ明母字が明母以外の唇音字と通用していることから、ウイグル漢字音においても漢語の明母の脱鼻音化を反映していたことが分かる。

17 高田 1985, p.146.

18 庄垣内 2001, p.268.

19 Csongor 1962, pp.51-52.

20 Eldal 1998, p.140.

21 Csongor 1962, p.51, Maue 2002, p.106.

22 例外も少なくない。庄垣内氏のテキスト A, G およびテキスト L では、一部の軽唇音声母字が p- で表記されている。これはウイグル語に本来存在しない /f-/ のウイグル音化と同氏は説明しておられる。また逆に漢語の重唇音を /f-/ を表す文字 v- で表記する例も見られる。同氏はこれについて、軽唇音化形式をモデルとした、ウイグル側での類推形と考えておられる。庄垣内 1995, pp.92-94, 庄垣内 1997, p. 8 を参照。吉田 1994はこれを一種の過剰矯正であると説明する。p.290, 注 (37) を参照。いずれにしてもウイグル語側での人為的な変化であることには違いなく、後述の「不」が vw と表記される例も同様の理由によると思われる。

23 ここでは「泡」～「不教」, 「浮」～「不」, 「沫」～「不脱」の三例において「不」が声母の読みに関わっている。この「不」は本来幫母 p- で後に軽唇音化して非母 f- となるグループに属している。しかしこの「不」は現在の北京方言を始めとする多くの方言で [pu] と発音されており、

ではなく、/b-/と推定される明母 m- と「桴」～「莫不」, 「夢」～「奉」²⁴ のように通用している。これについては、ウイグル語に本来存在しない発音/f-/が、ウイグル語化の過程で/b-/や/p-/と区別されなくなったために通用していると説明できる。²⁵

<舌頭音>

漢語の端 t-, 透 t'-, 定 d- はウイグル漢字音において/t-/と推定されている。つまり漢語の有声・無声, 有気・無気の違いを区別しない。今回の難字音注でも透母 t'- と定母 d- の通用「匱」～「定」, 定母 d- と端母 t- の通用「淳」～「丁」, 「敵」～「得」が見られる。来母 l- は他との通用がなく、一類をなしている。泥母 n- の例はない。²⁶

<牙喉音>

漢語の見 k-, 溪 k'-, 群 g-, 疑 ŋ-, 曉 h-, 匣 h- は、ウイグル文字資料において k- もしくは q- と表記される。k- と q- は後続する母音の性質によって補い合う関係にあり、漢語の三・四等に結合する場合は k- で、漢語の一・二等

例外的に中古音の p- の状態を保存している。ちなみに、チベット文字資料、コータンのブラーフミー文字資料では、漢語の「不」の発音を両唇音的に写す場合と唇齒音的に写す場合とがあるけれども、前者の方が圧倒的に多く、当時の西北方言では今日と同じように両唇音で発音されていたと考えられている。高田 1988, p.239を参照。よって、ウイグル漢字音でも「不」の声母は基本的に軽唇音化を逃れていた可能性が高い。ウイグル文字資料においては vw, pw と二種類の表記が見られるが、vw の表記は恐らくウイグル語側における人為的な変異形であろう。但し、ここでは全般的に軽唇音と重唇音が区別されていないので、「不」の声母だけが問題というわけではない。

24 鼻音韻尾を持つ明母字「夢」が奉母字「奉」と通用しているのが注目される。上述のように、鼻音韻尾を持つ明母の声母部分は/m-/となるのが普通であるが、この例では脱鼻音化が確認される。他の音注資料でも並母 b- と明母 m- の通用「免」～「便」(高田 1985, p.146) のように同じような例が見られるので、ウイグル漢字音の基礎となった漢語方言において、明母字が鼻音韻尾を持つ場合でも脱鼻音化することがあったと分かる。

25 ウイグル文字資料の例からは、/f-/がウイグル語化して/p-/や/b-/になっている可能性と、逆に/p-/や/b-/が軽唇音表記からの類推によって/f-/となっている可能性との両方が考えられる。ただ、/f-/がウイグル語に本来存在しない発音であることを考慮すれば、総合的な解釈としては/f-/がウイグル語化によって/p-/や/b-/になった可能性が高い。ちなみに、ブラーフミー文字で表記されたウイグル文献では、漢語の微母字「戊」を pu と表記する例が見られ、/v-/も/p-/や/b-/となっていたと思われる。Csongor 1962, p.51, Maue 2002, p.106.

26 ウイグル文字資料においては、泥母が鼻音韻尾の有無に関わらず t-, d- と表記されることが多い。よってウイグル漢字音では/d-/と推定されている。

を表記する場合は q- で表記される。k- と q- は両方とも有声・無声の閉鎖音及び摩擦音を表記することができる。ウイグル漢字音では、見母 k-, 溪母 k', 群母 g-/k-~q-/, 疑母 ŋ-/g-~x-/, 曉母 h-, 匣母 h-/x-~χ-/と推定されている。しかし、今回の難字音注では匣母 h- ~見母 k- の通用例「晃」~「光」が見られる。同じように軟口蓋の閉鎖音/k-~q-/と摩擦音/x-~χ-/を区別しない通用例は、他の資料にも数多く見ることができる。²⁷つまり難字音注においては、牙喉音の閉鎖音と摩擦音は区別されていない。これもウイグル語化によるものと考えられる。²⁸高田 1985は以上の諸声母のウイグル漢字音における発音を、疑母も含めて/k-/と推定している。²⁹

影母 ʔ- は他との通用はない。以母（喻四）j- と云母（喻三）h- の通用「耀」~「雨*」が見られるが、両声母はウイグル漢字音において区別されないので、特に問題とはしない。

＜齒頭音＞

五代~宋初に訳出されたと推定されるウイグル語訳『慈恩伝』においては、漢語の精母 ts-, 清母 ts'-, 從母 dz- を文字連続 ts- で表記し、心母 s-, 邪母 z- を s- と表記して、両者を区別していた。³⁰だが元朝期に成立したと考えられるウイグル文字資料では、両者を区別せず一律 s- と表記する。³¹これは恐らく/ts-/

27 詳しくは、庄垣内 2001, p.266-273, 高田 1985, p.145を参照。

28 ウイグル人がソグド文字で表記したと考えられるウイグル漢字音資料 Mainz では、一部補助記号を用いて牙喉音の閉鎖音と摩擦音を区別しているのが見られる。漢字音が導入された当初はウイグル語に存在しない発音の違いであっても区別しようとしていたのが分かる。吉田 1994, p.348-343を参照。

29 高田 1985, p.140。なお、疑母 ŋ- は一般にウイグル文字資料において k-, q- で表記されるが、例外的に「嚴」 yym 「言」 yyn と表記されることがある。高田 1985の難字音注には以母と疑母「鹽」~「嚴」、云母と疑母「炎」~「嚴」が通用しており、庄垣内 2001の難字音注においても以母と疑母「延」~「言」、影母と疑母「焉」~「言」の通用が見られる。庄垣内 2001はこれを『中原音韻』の形式と考えているが、チベット文字資料（高田 1988, pp.91-92）、敦煌写本の別字異文（邵 1963, p.201および松尾 1979, p.257）にも平行する例が見られるので、高田 1988が述べるように、西北方言の疑母字の一部において、非規範的な発音として個別的に ŋ- が脱落していたことの反映であると考えられるべきであろう。この現象は高田 1988が注目しているように、元韻および嚴韻に集中しているのは確かであるが、邵 1963の掲げる別字異文に遇撰字の例が多く見られることにも注意すべきである。

30 庄垣内 1986, pp.32-33。

31 庄垣内 1995, pp.98-99, 同 1997, p.9, 同 2001, p.259。

というウイグル語に存在しない破擦音が、摩擦音/s-/にとって替わられたもので、歯頭音声母のウイグル漢字音における発音は破擦音と摩擦音を区別せず、³² 全て/s-/と推定されている。今回の難字音注でも従母 dz- と清母 ts'- の通用例「賤」～「千」、心母 s- と精母 ts- の通用例「惜」～「即」が見られる。よって、この資料の成立時期は元朝期頃ではないかと考えられる。

<正歯音・歯上音・舌上音>

漢語の莊 t_ʃ-, 初 t_ʃ'-, 章 t_ʃ-, 昌 t_ʃ'-, 知 t-, 徹 t'-, 澄 d- はウイグル文字資料においてと č- 表記され、その発音は/č-/と推定されている。また生 ʃ-, 書 ʃ-, 禪 z-, 崇 d_ʒ-, 船 dz- は š- と表記され、/š-/と推定されている。今回の難字音注でも舌上音の知母 t- と正歯音の昌母 t_ʃ'- の通用例が見られる。また正歯音の船母 dz-, 書母 ʃ-, 生母 ʃ- が通用する。なお、歯上音の莊母 t_ʃ- と正歯音の精母 ts- との通用例「滓」～「子」が見られる。これは他の資料に見られない通用である。チベット文字資料では莊母 t_ʃ- が ts-, 'ts-, 'tsh- と写されることもあるので、³³ 漢語の西北方言で一部の莊母 t_ʃ- を精母 ts- のように発音していたのがウイグル漢字音に反映されたのかもしれない。

漢語の日母 ɲ- は西北方言で鼻音性を失い摩擦音化していた。これは『慈恩伝』およびソグド文字で表記された漢字音資料において文字 ž- で表記され、ウイグル漢字音では有声の摩擦音/ž-/と推定されている。³⁴ だが、ウイグル文字資料では時代が下ると s-, š- で表記するようになった。³⁵ これは吉田 1994によると、/ž-/が一旦ウイグル語の中に定着した後、更に漢字音がウイグル語化する過程で無声化したと説明される。³⁶ 今回の難字音注でも日母 ɲ- と書母 ʃ- の通用「焼」～「而了」、「姪」～「深」が見られる。つまりウイグル語化の進行し

32 庄垣内 1995, p.99。

33 高田 1988, p.54。

34 庄垣内 1986, p.36。吉田 1994, p.348。

35 庄垣内 1995, p.101。

36 吉田 1994, p.320。一方、庄垣内 1995は、s-, š- は有声の/ž-/と無声の/š-/の両方を表示できるとの理由から、このウイグル漢字音における日母を/ž-/と推定する。p.101を参照。

韻母による分類表

表2 摂の枠を出ないもの

撰	被注字	音 注	被 注 字		音 注		テキスト
通～通	夢 鎔	奉 用	合三送・去 合三鍾・平	iəuŋ ioŋ	合三腫・上 合三用・去	ioŋ ioŋ	金 1 金 3
止～止	滓	子	開三止・上	iəi	開三止・上	iəi	金 3
蟹～蟹	改隘 桂* 欸*	開 於界 古恵 経開	開一海・上	ɿi	開一哈・平	ɿi	金 2
			開二卦・去	ai	開二怪・去	ɐi	妙 4
			合四霽・去	uei	合四霽・去	uei	妙 4
			開一代・去	ɿi	開一哈・平	ɿi	妙 5
臻～臻	脣	所云	合三諄・平	yən	合三文・平	yən	妙 1
山～山	鑽 釧 彈 賤 匾 沫*	還 轉 斷 千 遍 不脱	合一刪・平	an	合一刪・平	an	金 2
			合三線・去	yen	合三線 ³⁸ ・上	yen	金 2
			開一寒・平	an	合一換・去	uan	妙 5
			開三線・去	ien	開四先・平	en	金 4
			開四銑・上	en	開四霰・去	en	妙 2
			合一沒・入	uət	合一末・入	uat	妙 3
效～效	泡 銷 燒	不教 小 而了	開二肴・平	au	開二肴 ³⁹ ・平	au	妙 3
			開三宵・平	ieu	開三小・上	ieu	金 2
			開三宵・平	ieu	開四嘯・去	eu	金 3
宕～宕	晃 枉 傷	光 於王 常	合一蕩・上	aŋ	合一唐・平	aŋ	金 5
			合三養・上	yaŋ	合三陽・平	yaŋ	金 3
			開三陽・平	iaŋ	開三陽・平	iaŋ	金 5
梗～梗	渟 屏	丁 平	開四青・平	eŋ	開四青・平	eŋ	金 3
			開三庚・平	iaŋ	開四青・平	eŋ	金 4
曾～曾	楞	力勝	開一登・平	əŋ	開三蒸 ⁴⁰ ・平	iəŋ	金 1
流～流	浮 桴	不 莫不	開三尤・平	iəu	開三尤・平	iəu	金 4
			開三尤・平	iəu	開三尤・平	iəu	金 5
深～深	妊	深	開三沁・去	iēm	開三侵・平	iēm	妙 4
咸～咸	闇	暗	開一勘・去	ɿm	開一勘・去	ɿm	妙 5

たウイグル漢字音では日母 *p-* が /š-/ と読まれていたことが分かる。他の難字音注においても日母 *p-* と禪母 *z-* の「讓」～「上」³⁷ のように通用しているのが見られる。

37 高田 1985, p.139-138。

38 「轉」には上声の読みもある。

39 「教」には去声の読みもある。

40 「勝」には去声の読みもある。

表3 摂の枠をはみ出すもの

攝	被注字	音 注	被 注 字		音 注		テキスト
蟹～止	計 鯨	其 利	開四霽・去	ei	開三之・平	iǎi	金 1
			開四齊・平	ei	開三至・去	ii	妙 2
蟹～梗	匱	定	開四齊・平	ei	開四徑・去	eŋ	妙 2
遇～宕	虎	黄	合一姥・上	o	合一唐・平	uaŋ	妙 4
效～遇	耀	雨*	開三笑・去	ieu	合三麌・上	yuo	金 5
梗～曾	敵 惜 適	得 即 食	開四錫・入	ek	開一德・入	ək	金 4
			開三昔・入	iek	開三職・入	iǎk	金 4
			開三昔・入	iek	開三職・入	iǎk	金 5

以上、声母の通用状況は、基本的にウイグル漢字音の特徴に合致しているが、一部、推定されたウイグル漢字音との間に違いが見られた。それは、本来ウイグル語に存在しない漢字音の発音の区別が、ウイグル語化によって区別を失ったためであると考えられる。

2.2. 韻母の通用状況に関する考察

次に、韻母の通用状況について考察を行う。音注を摂ごとに整理し、摂の枠をはみ出すものとそうでないものとに分けて、分類表を作成した。表2は被注字と音注との関係が摂の枠を出ないもの、表3は摂の枠をはみ出すものである。

2.2.1. 声調の区別について

<入声と「不」>

漢語の入声末尾の子音は、ウイグル文字資料において必ず -p, -r, -k, -q の文字によって表記される。これは即ち、ウイグル漢字音の基礎となった漢語方言においては、漢字音導入当時、入声韻尾がまだ消失していなかったことを示すものである。よって、吉田 1994がウイグル漢字音の成立時期を、西ウイグル国が成立した9世紀後半から10世紀後半までの間と推定するのは妥当である⁴¹。このような入声韻尾を保存する状況は、元朝期の成立とされるウ

41 吉田 1994, p.310. 吉田 1994によればMainzは10世紀（後半）の成立であると言い、ウイグル

イグル漢字音資料においても一般的に見られる。このことから、それらの資料が反映するのは元朝期に行われていた漢語方言音ではなく、比較的早い時期にウイグルに導入された後、元朝に至るまで継承されていたウイグルの漢字音であることは明らかである。

表2、表3を見ると、入声字は入声字で音注されており、他声調との通用がない。しかも被音注字と音注に使用されている入声字では音節末尾の子音が共通している。但し、入声との関連において、「不」の韻母部分について説明しておく必要がある。この「不」は、『広韻』において甫鳩切（尤韻），方久切（有韻），甫救切（宥韻），分勿切（物韻）と4種類の読み方がある。従って、これは入声と考えるべきかどうかが問題となる。ウイグル文字資料においては「不」をvw, pw等と表記するので、ウイグル漢字音導入時の漢語における「不」の読みは入声ではなかったと考えられる⁴²。従って、今回の難字音注で用いられている「不」を非入声として扱うと、入声字は全て入声字によって音注されている（5例）ことになる。つまり、この資料も他のウイグル漢字音資料と同様、入声末尾の子音を保存した状態にあると言える。

<舒声韻（平上去）>

ここでは舒声韻31例のうち、「不」を平声と考えたとしても、18例の声調が合わない。これは半数以上にも上る数である。つまり漢語の平上去の区別は考慮されていないことが分かる。このことは他の難字音注においても同様である⁴⁴。

ウイグル語訳『慈音伝』は五代～宋初の成立であると考えられているので、遅くともそれ以前には漢字音の導入が完了していたはずである。

42 庄垣内 2001, p.264。

43 敦煌出土のチベット文字資料においては、漢語の入声末尾の閉鎖子音は原則として表記されるのだが、「不」はpu, phu, bu, 'bu, po, wuと写され、入声でないことが分かる。また、コータンのブラーフミー文字資料では「不」をまれにhviraと表記することもあるが、paと写するのが一般的なので、やはり非入声であったと考えられる。『金剛經』（kbr）のhvū; hvū:, hū:という表記については上述。高田 1988, p.239および同書の附録3「資料対音表」を参照。

44 高田 1990, pp.329-330。庄垣内 2001, pp.268-271。

2.2.2. 撮の枠を出ないもの

同撮内の音注であっても、開合・等位などを異にするものが見られるので、以下、声母の場合と同様に、推定されたウイグル漢字音との比較を通して、その具体的な通用状況について考察を行う。

<通撮>

今回の難字音注では送韻（東三系）と腫韻（鍾韻系）の通用「夢」～「奉」が見られる。『慧琳音義』ではこの二韻を区別するが、チベット文字資料では⁴⁵-ung と表記して区別しない。ウイグル文字資料においてもこの二韻は区別されず⁴⁶-wnk と表記され、/-uŋ/と推定されている。他の難字音注でも「聰（東三）」～「從（鍾）」、「癰（東三）」～「龍（鍾）」の通用例が見える。⁴⁷

<止撮>

撮内部では特に説明が必要な音注はない。

<蟹撮>

二等重韻、つまりここでは卦韻（佳韻系）と怪韻（皆韻系）の通用「隘」～「矜界」が見られる。二等重韻は『慧琳音義』においてすでに合流しており、ウイグル漢字音でも区別されることはなく、この通用は問題とするに足りない。

<臻撮>

諄韻と文韻の通用例「脣」～「所云」が見られる。この通用もウイグル漢字音では特に問題としない。

45 高田 1988, p.177。

46 庄垣内 1995, p.127。

47 高田 1990, pp.334-335。

＜山摂＞

線韻（仙韻系）と先韻（先韻系）の通用「賤」～「千」が見られる。ウイグル漢字音において三等韻と純四等韻は区別されない⁴⁸ので、特に論じる必要はない。

寒韻（開口）と換韻（合口）の通用「彈」～「斷」が見られる。『慈恩伝』では介音の開合を区別しているが、元朝期に成立したと思われるウイグル文字資料では、果摂、蟹摂、山摂一二等の合口介音が表記されていない⁴⁹。また他の難字音注においても「灌（合）」～「干（開）」⁵⁰、「駝（開）」～「唾（合）」、「怪（合）」～「蓋（開）」、「關（合）」～「間（開）」⁵¹のように、合口字と開口字が通用する例が見られる。よってここでの開合を無視した通用例も、ウイグル語化の進んだウイグル漢字音の反映であり、同時に資料が元朝期のものであることを示すものである。

＜效摂＞

宵韻（三等韻）と嘯韻（純四等韻）の通用例「焼」～「而了」が見られる。これも三等韻と四等韻の通用なので、ウイグル漢字音では同音と推定されている⁵²。

＜宕摂＞

摂内部では特に説明が必要な音注はない。

＜梗摂＞

庚韻（三等韻）と青韻（純四等韻）の通用「屏」～「平」が見られる。この二韻も三等韻と四等韻の通用なので特に問題はない。

錫韻（純四等韻）と麥韻（二等韻）の通用「擊」～「革*」が見られる。ウイグル文字資料ではそれぞれ錫韻 -yk, 麥韻 -'q と表記されるので、錫韻/-eg/,

48 庄垣内 1986, p.75。

49 庄垣内 1995, p.109, p.119, 同 2001, p.259。

50 庄垣内 2001, p.270。

51 高田 1990, pp.330-333。

52 庄垣内 1995, p.115によると、宵韻字の一部が 'w と表記されることもある。

麥韻/-ax/と推定されている。よってこの二韻が通用するのは問題となる。但しこの「革*」はあくまでも推定した音注なので、今は解釈を保留にしておく。

<曾摂>

ウイグル文字資料では登韻（一等韻）と蒸韻（三等韻）を共に -ynk と表記する。『慈恩伝』では登韻の「恒」を qynk と表記する。⁵³ 従って、登韻の -ynk は後舌で、蒸韻とは区別されていたと思われる。ウイグル漢字音では登韻 /-iŋ/, 蒸韻 /-iŋ/ と推定されている。⁵⁴ だが今回の難字音注では登韻と蒸韻の通用「楞」～「力勝」が見られる。一等韻と三等韻の通用例は高田 1990でも報告されているので、ウイグル漢字音では時折見られる現象であったと思われる。

<流摂・深摂・咸摂>

摂内部では特に説明が必要な音注はない。

2.2.3. 摂の枠をはみ出すもの

<蟹摂～止摂>

止摂と蟹摂四等韻の通用例「計」～「其」, 「鰲」～「利」が見られる。この二韻はウイグル文字資料では共に -y と表記され、ウイグル漢字音は /-i/ と推定されている。この推定音に従えば、ここでの通用は問題ない。

<蟹摂～梗摂>

ウイグル文字資料では梗摂三・四等韻を -y と表記し、軟口蓋鼻音韻尾 -ŋ の消失が認められる。ウイグル漢字音では /-e/ と推定されている。⁵⁵ 例えばウイグルのブラーフミー文字資料では、漢語の梗摂三・四等韻を -e と写している。⁵⁶

53 庄垣内 1986, p.56。

54 庄垣内 1995, p.124。

55 庄垣内 1995, p.112。

56 Csongor 1962, p.51, Maue 2002, pp.106-108.

しかし、従来扱われた難字音注では梗摂三・四等韻が同摂内で音注されていたため、-ŋ の消失を確認することができなかった。今回の難字音注では蟹摂字「匱」が梗摂字「定」で音注されており、-ŋ の消失を示しているものと解される。但し、上述したようにウイグル漢字音では蟹摂三・四等韻が/-i/と推定されている。⁵⁷これが/-e/と推定される梗摂三・四等韻と通用するのも、やはりウイグル語化の過程で同音になることがあったためと思われる。⁵⁸

＜遇摂～宕摂＞

遇摂・模韻はウイグル文字資料で -w と表記され、ウイグル漢字音では/-u/と推定されている。⁵⁹一方、宕摂・唐韻も同様に -w と表記され、梗摂三・四等韻の場合と同様、鼻音韻尾 -ŋ の消失が認められ、唐韻/-o/と推定されている。⁶⁰但し、今回の難字音注では主母音の異なる模韻字「虎」と唐韻字「黄」が通用するという特異な現象が見られる。漢語側においてこの二韻は区別されていたはずである。なぜなら、コータンのブラーフミー文字資料において漢語の模韻は -ü, 唐韻は -ā (o を表す) または -au として区別されるからである。他の難字音注に類似の例で「卓」/čog/～「主六」/čug/という通用が見られるので、⁶¹ここでの遇摂/-u/～宕摂/-o/間の通用もウイグル語化の現れであると考えられる。

また梗摂と同様、従来の難字音注では確認されることのなかった宕摂の鼻音韻尾 -ŋ の消失を、この通用から確認できたことは非常に重要である。この音注字「黄」が誤写でない限り、-ŋ の消失は明らかである。

57 ウイグルのブラーフミー文字資料では祭韻字「閉」を pi, 梗摂三・四等韻を -e と表記して区別している。Csongor 1962, p.51, Maue 2002, pp.106-108.

58 漢語の西北方言の側でも蟹摂三・四等韻と梗摂三・四等韻を同様に発音することが多かったようである。例えば『開蒙要訓』の音注においては両者の通用が見られる。羅 1933, pp.98-100を参照。チベット文字資料, コータンのブラーフミー文字資料においても齊韻・祭韻は梗摂三・四等韻と同様に表記されることが多い。よって、ここでの通用は漢語側におけるこのような状況がウイグル漢字音にそのまま取り入れられたものである可能性も考えられる。

59 庄垣内 1995, p.110.

60 庄垣内 1995, p.123.

61 高田 1990, p.336.

＜效撰～遇撰＞

效撰・笑韻と遇撰・麌韻の通用「耀」～「雨*」が見られる。但し、テキストの判読に問題があって、実は反切注ということであれば通用と言えなくなる。ウイグル文字資料で「耀」を音写した例は見つかっていないが、宵韻は一般に yw（推定音/eu/）と表記されるので、「耀」 yw という表記が予想できる。一方の「雨*」はウイグル文字資料で yw（推定音/yu/）と表記される。ウイグル漢字音では同音と推定されてはいないが、文字表記の上では同じになるので、直音注として通用している可能性も否定できない。

＜梗撰～曾撰＞

梗撰・昔韻と曾撰・職韻の通用例「惜」～「即」, 「適」～「食」が見られる。同様の例は他の音注資料で「礫（梗撰）」～「力（曾撰）」という通用がある。⁶² ウイグル文字資料ではどちらも -yk と表記されるが、ウイグル漢字音では梗撰三・四等韻の入声/-eg/, 曾撰三等入声/-ig/と区別して推定されている。⁶³ ちなみにチベット文字では両者を -ig と表記して区別がない。羅 1933によれば『開蒙要訓』においても両者の間に通用が見られる。即ち「錫」～「惜」, 「翊」～「亦」, 「躑」～「直」, 「靄」～「力」, 「鐸」～「力」である。よって羅氏は両者の唐五代西北方言における発音を共に -ig と推定しているが、⁶⁴ 以上の例は全て舌齒音（以母は正齒音に準じる）であるので、今は舌齒音下でのみ合流があったと考える。⁶⁵ よって、ここでの音注は漢語側での発音をそのまま取り

62 高田 1990, p.335。

63 庄垣内 1995, p.124, p.126。

64 羅 1933, pp.118-119。梗撰・曾撰の合流過程については佐藤 1973, 花登 1974に詳しい。花登 1974は、反切上字の主母音までを母字と一致させる『敦煌毛氏音残卷』反切と慧琳『一切経音義』の反切において、梗撰と曾撰との間に反切上字の通用があることを指摘しているが、慧琳『一切経音義』の反切に関しては、反切上字ばかりではなく、反切下字においても梗撰・曾撰の通用が見られる。

65 慧琳『一切経音義』の反切に見られる昔・錫韻と職韻の通用も舌齒音字ばかりである。邵 1963の掲げる別字異文中の昔・職韻代用例もまた舌齒音字である。また東ヶ崎 2003は、朱翱『説文解字繫伝』の反切下字における梗撰入声（昔韻）と曾撰入声（職韻）の混用が舌齒音下のみで見られることを指摘している。

入れた結果と考えると何の問題もない。だが、土着したウイグル漢字音が漢語側における合流の条件をそのまま保存し得ていたとは限らない。

ここでは更に、梗摂・錫韻と曾摂・徳韻の通用例「敵」～「得」も見られる。ウイグル文字資料では -yk と表記し、前舌的であったことは明らかである。よってウイグル漢字音においては職韻と同様に /-ig/ と推定されている。すでに述べたように、昔・錫韻と職韻は舌歯音下で一類となっていたと考えられるから、ウイグル漢字音では更に徳韻も含めて同音となっていたものと思われる。

以上、声調、韻母面においても、合口要素や拗音要素を捨象する等、ウイグル漢字音の特徴が濃厚に反映しているが、推定されたウイグル漢字音と比べて通用の程度が甚だしい。その中には漢語側における合流状況の反映や、この資料に特有な現象も存在するが、多くは他の資料に見られる特徴と共通しており、ウイグル語化の進んだウイグル漢字音の現実的な反映であると考ええる。

3. まとめ：ウイグル漢字音のウイグル語化と「二層の字音」説について

前章で二断片の音注状況を検討した結果、推定されたウイグル漢字音との間に異なる点が幾つか見られた。それらは往々にして、本来ウイグル語に存在しない発音か、またはウイグル文字では区別されない発音のどちらかが関係していた。

庄垣内氏のウイグル漢字音は、基本的にウイグル文字資料に依拠して推定されたものである。ウイグル文字は子音、母音の細かな違いを区別することができないため、音価の推定には限界がある。一方、難字音注からはウイグル文字で表現されない特徴が確認される。それらはウイグル語自身の音韻的制約やウイグル語化に起因するものであるが、多くは他の難字音注にも共通して見られる特徴である。従って、難字音注から得られる情報を利用することによって、より現実的なウイグル漢字音を推定することが可能になるものと考ええる。

もちろん、ウイグル文字資料の示す漢字音体系と、難字音注の示す漢字音体系が全く同質のものかどうか、判断するのは難しい。しかしながら、問題とされる箇所の大半はウイグル文字で区別して表記できない部分であるので、同質でな

いことを証明するのは不可能であろう。いずれにしても今後のウイグル漢字音研究において、更に多くの難字音注が利用されるようになれば、ウイグル漢字音の詳細がより一層明らかにされるものと予想する。その際には、筆者が提案した幾つかの暫定的な解釈についても、その是非を検討してみる必要があるだろう。

ところで、今回の難字音注には他の難字音注には見られない特徴も見られた。一つは軽唇音と重唇音を区別しない点である。これは、齒頭音において破擦音と摩擦音が通用したり、日母が書母と通用するのと同様の現象で、ウイグル語化が一層進んでいたことの現れと理解できる。

もう一つは、宕摂、梗摂における鼻音韻尾 $-ŋ$ の消失を明らかに示す通用が見られたことである。これまで高田 1985, 同 1990, 庄垣内 2001によって扱われた難字音注にはこのような通用がなく、宕摂、梗摂字は同摂字で音注されていたため、鼻音韻尾 $-ŋ$ の消失を確認することができなかった。そこで高田 1990は、ウイグル漢字音は二層から成り、一つは長安音を基礎とした標準音 ($-ŋ$ を保存) を導入したもので、もう一つは「河西方言」 ($-ŋ$ が消失) を導入したものであったと解釈した。

だが、この「二層の字音」説は吉田 1994, 庄垣内 2001等によって反論されている。その最大の理由は、ウイグル文字で書かれた漢字音の資料およびウイグル人がソグド文字で書いたとされる漢字音の資料においては、宕摂 $-w$, 梗摂 $-y$ のように「河西方言」型の特徴を示す表記がなされ、高田説の $-ŋ$ 韻尾保存を支持するような表記が見つからないことに他ならない。また、宕摂 $-o/$, 梗摂 $-e/$ と推定されているため、難字音注では他摂と通用することがないとも考えることもできる。他にもいくつかの理由が両氏の論文に挙げられているが、要するに、ウイグル漢字音が二層になっていたと考える必要はなく、基本的には宕摂、梗摂の鼻音韻尾 $-ŋ$ が消失した漢語方言、即ち高田氏のいわゆる「河西方言」のみを基礎としていた考えられている。⁶⁶

今回の資料においては、宕摂、梗摂における鼻音韻尾 $-ŋ$ の消失を示す例が確

66 吉田 1994, pp.314-311, 庄垣内 2001, p.272。

認された。このことは、ウイグル文字資料のみならず難字音注という形式の資料であっても「河西方言」型のウイグル漢字音を反映することが明らかとなった。今回の資料では/-u/と/-o/, /-i/と/-e/の通用から、鼻音韻尾 -ŋ の消失を確認することができたのであって、ウイグル語化の程度によってはこの種の通用は見られなかったと思われる。従来扱われた難字音注において宕摂、梗摂字が同摂字で音注されていたのは、或いは鼻音韻尾 -ŋ は消失していたが、今回の資料ほどにはウイグル語化を反映していないために通用が見られないに過ぎないという可能性も考えられる。この点は、今後の研究によって検討されるべき課題であると考えらる。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、指導してくださった太田斎先生、吉田豊先生に厚く御礼申し上げます。

参考文献：

- Csongor, B. 1952, Chinese in the Uighur Script of the T'ang-period, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. 2, pp.73-121
 ———— 1962, Chinese glosses in Uighur texts written in Brahmi, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. 15, pp.49-53
 Erdal, M. 1998, Old Turkic, *The Turkic Languages*, Routledge, pp.138-157
 花登正宏 1974 「中古中国語の喉音韻尾 一特に曾・梗摂の合流について—」『集刊東洋学』32, pp.146-126
 平山久雄 1968 「Ⅱ音韻論 3.中古漢語の音韻」『中国文化叢書 言語Ⅰ』大修館書店 pp.112-166
 罗常培 1933《唐五代西北方音》国立中央研究院历史语言研究所单刊甲种之十二
 刘广和 1984《唐代八世纪长安音声组》《语文研究》第3期 pp.45-50
 Maspero, H. 1920, Le dialecte de Tsh'ang-ngan sous les T'ang, *BEFEO*. XX, No.2
 Maue, D. 2002, Altbekanntes und Neues: Bruchstücke des uigurischen Almanachs von 1277/78,『内陸アジア言語の研究』XⅦ 中央ユーラシア学研究会, pp.77-115
 水谷真成 1957 「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋學報』第39卷 第4号 pp.1-31, 水谷真成1994 p.59-87
 ———— 1994『中国語史研究 中国語学とインド学との接点』三省堂

- 榮新江 1998<德國“吐魯番收集品”中的漢文典籍與文書>, 饒宗頤編《華學》3, 北京紫禁城出版社, p.309-325
- 佐藤 昭 1973「中古中国語の曾撰梗撰合流の進行過程」『集刊東洋学』29, pp.59-75
- Schmitt, G. und Thilo, T. 1975, *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente*, Band 1, 1975 Berlin
- 邵榮芬 1963<敦煌俗文学中的別字异文和唐五代西北方音>《中国语文》1963年 第3期, pp.193-217
- 庄垣内正弘 1986「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』Ⅱ 神戸市外国語大学外国学研究所, pp.17-156
- 1988「ウイグル語」『言語学大辞典第1巻・世界言語編(上)』三省堂 pp.738-741
- 1995「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について —ウイグル漢字音の研究—」『言語学研究』第14号, 京都大学大学院文学研究科, pp.65-153
- 1997「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について —ウイグル漢字音の研究— (続)」『西南アジア研究』No.46, pp.1-31
- 2000「ロシア所蔵ウイグル語断片の研究2 『阿含經』『千字文』『阿毘達磨俱舍論実義疏』」『京都大学言語学研究』第19号, pp.147-190
- 2001「ロシア所蔵ウイグル語断片の研究3」『京都大学言語学研究』第20号, pp.243-277
- 2003「ロシア所蔵ウイグル語文献の研究 —ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト—」ユーラシア古語文献研究叢書1, 京都大学大学院文学研究科
- 高田時雄 1985「ウイグル字音考」『東方学』第70号 pp.134-150
- 1988『敦煌資料による中国語史の研究 一九・十世紀の河西方言—』創文社
- 1990「ウイグル字音大概」『東方学報』第62冊 pp.329-343
- 1999<回鶻文《慈恩傳》中の漢語詞彙和河西方言—兼論回鶻字音歴史變遷> 饒宗頤主編《敦煌文藪》(上), 新文豐出版公司, pp.61-83
- 東ヶ崎祐一 2003「『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用—梗撰入声と曾撰入声, および外転一等韻と二等韻の間の一」『中国語学』250, pp.32-49
- 上田 正 1987『慧琳反切総覧』汲古書院
- 吉田 豊 1994「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』第66冊 pp.380-271
- Yoshida, Y. 1999, Further remarks on the Sino-Uighur problem', 『アジア言語論叢』3 神戸市外国語大学外国学研究所, pp.1-11